

大学時報

U N I V E R S I T Y C U R R E N T R E V I E W

No.387

2019

7

隔月刊



生き続ける建築（ノートルダム清心女子大学）

特集 学生寮を活用した国際交流、 グローバル人材育成の取り組み

座談会 私立大学におけるインターンシップ推進を振り返る

特別インタビュー 大学スポーツ振興の社会的意義

——大学スポーツ協会（UNIVAS）の設立

明日への試み 京都産業大学 わが大学史の一場面 拓殖大学

加盟校の幸福度ランキングアップ 広島女学院大学／恵泉女学園大学／皇學館大学

クローズアップ・インタビュー

トナミ運輸バドミントン部アシスタントコーチ 武下 利一さん

日本私立大学連盟



「一人を愛し、一人を育む。」

大学のタグライン・「一人を愛し、一人を育む。」

2018年度に創立30周年を迎えるに当たり、学生・教員・職員が協働して新たなタグラインを考案し、これを広く世に発表した。それが「一人を愛し、一人を育む。」である。

プロテストント・キリスト教の精神を基盤とする聖学院大学は、開学以来「神を仰ぎ 人に仕う」という建学の精神に基づく人材教育を行ってきたが、それは「一人の個性が他者に仕える人になり、他者と共に生きる人」、ひいてはそのような意味において「現代の市民社会の各分野で貢献できる人物」を育成することを目的として創設された大学であるということである。それはまた「既存の数ある有力なキリスト教大学と並列されるもう一つの大学ではなく、新しい大学、ユニークな大学」を目指すものでもあった。

このような理想掲げる本学は、開学当初から徹底した少人数教育を行い、「面倒見のよい大学」として評価をいただいていたが、創立30周年を機に改めてその「面倒見のよさ」の実質を見つめ直し、より深化させるために、今後何十年経っても揺らぐことのない聖学院大学らしさを新たなタグラインで表現することとなった。それはまた、学生一人ひとりと距離感を大切に、近すぎず、遠すぎず、見守りながら、一人ひとりの可能性を育む大学であり続けるというプロミスでもある。

神によって創造されたかけがえない存在である学生を愛し、その魂の豊かな可能性を支えつつ、リベラルアーツを基盤とする専門教育を通して各人の個性と能力を引き出すこと。そして、そうした教育を通じて、本学の建学の精神を体現する「一人」を育成し、「愛された一人」「育まれた一人」が「一人を愛する」「一人を育む」人になること。キリスト教の精神に基づく人格教育が醸成する「文化共同体」としての聖学院大学は、その理想ゆえに常に「ユニークな課題」を突き付けられている大学であるということができよう。

大学時報

No.387

2019.7

Thesaurus Universitatis だいがくのたから 聖学院大学

表紙・大学点描 ノートルダム清心女子大学

巻頭言 「Memoria 記憶」をもつ大学

高等教育における女子教育を考える

座談会 私立大学におけるインターンシップ推進を振り返る

三橋秀彦／佐藤文博／木本浩一／久保秀雄／(司会) 音 好宏

特集 学生寮を活用した国際交流、グローバル人材育成の取り組み

グローバル教育のハブ・サロン機能

TUTグローバルハウス——成長へのスパイラル

大学の教育力強化を目指す国際交流施設「RYUTOPIA」

国際寮「グローバル・ドミトリ」の挑戦

多文化交流を目的とした国際学生宿舎

国際的な文化交流、相互理解を育む美大の国際寮

すいそう 父の背中

特別インタビュー

大学スポーツ振興の社会的意義——大学スポーツ協会（UNIVAS）の設立

(聞き手)

山田健太／鎌田 薫
長野 香

定員管理に関する私大連の意見

坂下嬢子

私大連フォーラム2019——「高等教育政策と公財政支援」総括

80

74

66

64

60

56

50

44

38

32

30

14

10

私の授業実践——教育現場の最前線から

現代社会の中の大学教育——双方向的な教育の取り組み

小林信重

90

明日への試み

京都産業大学国際関係学部
新たな「グローバル人材」育成を目指して

鈴井清巳

92

わが大学史の一場面——日本の近代化と大学の歴史

アジア近代化の開拓者を生んだ学校教育

長谷部茂

100

——拓殖大学国際人材育成の軌跡・拓殖大学

加盟校の幸福度ランキングアップ《グローバル事業（イベント）編》

ヴィジョンを高める海外ピースタディ・広島女学院大学

宇根 治

106

タイ長期フィールドスタディで、自分が変わる

押山正紀

108

グローバル市民を育てる——汝の光を輝かせ——・恵泉女学園大学

伊勢から世界へ、世界から伊勢へ

玉田 功

110

——「伊勢」と日本スタディプログラム・皇學館大学

クローズアップ・インタビュー

トナミ運輸バドミントン部アシスタントコーチ 武下利一さんに聞く

（聞き手）外川智恵

112

新会員代表者紹介

京都橘大学／松山東雲女子大学／立正大学／常磐大学

120

新加盟大学・会員代表者紹介

金沢星稜大学

122

執筆者・出席者のご紹介・123

連盟ニュース・125

編集後記・126

〈カット〉熊谷有子

〈表紙写真〉

生き続ける建築（ノートルダム清心女子大学）



現在も使用されているノートルダムホール本館と東棟は、1929年に建造され、本年は竣工90周年にあたります。設計者はアントニン・レーモンド。世界的に著名な建築家フランク・ロイド・ライトの助手として来日し、西洋の近代建築と日本の伝統的建築を融合させる設計手法を編み出した建築家です。

本学の設立母体であるナミュール・ノートルダム修道女会は、1924年に米国から来岡しました。米国の先進的な教育手法を一方的に押し付けるのではなく、日本の文化や日本人の気質を大切に、本学独自の教育を形成しました。ノートルダムホール本館と東棟は、建学時の教育方針を象徴する建物として90年間生き続けています。

なお、両校舎は昭和初期の日本におけるモダニズム建築として貴重な存在であり、いまでもその姿のままで使われ続けている建築遺産であることから、2007年に国の登録有形文化財として登録されました。

大学点描

世界が広がる



地域と繋がる



ノートルダム清心女子大学

NOTRE DAME SEISHIN UNIVERSITY

History

ノートルダム清心女子大学は2019年に創立70周年を迎えました。

本学の設立母体は19世紀初頭、子女教育に専念する目的を持って、フランスで創設されたカトリックの修道会ナミュール・ノートルダム修道女会。1924年に修道会創立者聖ジュリー・ビリアートの信条を受け継いだ6名のシスターが、岡山市内の高等女学校の経営を引き継ぎました。以来、幾多の苦難を乗り越え、1949年に岡山県初の4年制女子大学を創立したのです。



最初に来日した6名のシスターたち 船上にて



1期生から続く伝統行事(卒業証書・学位記授与式)



初代学長 シスター・メリー・コスカ(右)と
2代学長 シスター・エマー・ジュリー(左)

ノートルダム清心女子大学の原点
それはアメリカから岡山の地へ向かう6名のシスターから始まった。

地域と繋がる 世界が広がる

ノートルダム清心女子大学は
「社会に対しても、世界に対しても開かれた大学」として
人と世界を繋ぎ、平和でより良い社会をつくります。



瀬戸内海・直島にて国際交流



西日本豪雨支援ボランティア募金活動



春の校舎見学ツアー「特別見学会」



産学連携による荒廃した茶畑の再生活動(岡山県高梁市)



真の自由人として生きてゆく。
自ら考え、判断し、行動する女性、
そして、それらに責任を担う女性に。

文学部

英語英文学科



日本語日本文学科



現代社会学科



人間生活学部

人間生活学科



児童学科



食品栄養学科



ノートルダム清心女子大学

NOTRE DAME SEISHIN UNIVERSITY

大学時報

No.387

2019.7



「Memoria 記憶」をもつ大学

原田 豊己 ● ノートルダム清心女子大学長

ノートルダム清心女子大学の「記憶」は、1751年フランスで生まれた聖ジュリー・ベリアートに遡る。彼女は、ナミュール・ノートルダム修道女会の創立者であり、カトリック教会の信仰の中で、豊かな知性と良識を持つ女性に育ち、いつも「善き神のいかに善きことよ」の言葉を口ずさんでいた。本学は、聖ジュリーの志を継いだ6名のシスターが女子のための教育を岡山の地で始め、戦禍を乗り越え、1949年女子大学として誕生した。現在も、岡山県内唯一の女子大学として「善き神によって創造された人間が、真の自由人として真・善・美を追求する」という理念のもと、社会と平和のために貢献する力を身に付ける女子教育に取り組んでいる。

高等教育における女子教育を考える

川久保 清 ● 共立女子大学・共立女子短期大学学長

共立女子大学・女子短期大学の学長に就任以来1年、「貴学の女子大学としての特徴は？ メリットは？」などと聞かれることが多くなり、いつも「女子大学とは」と自問するが、残念ながら答えはいまだ得られていない。高等教育における女子教育から、女子大学の方向性を考えてみたい。

医学部入試において、女子学生に対して公正ではない入試が行われていたことが明らかになってから、高等教育における女子教育が再び社会的に注目されるようになった。東京大学のホームページに、2019年4月12日入学式の上野千鶴子名誉教授の祝辞が掲載されている。ジェンダー研究の先覚者として、親の性差別の意識が4年制大学進学率の男女差を生み出している、入学後には東大のサークル活動などで性差別がある、社会においても性差別が相変わらず

ずある、という論旨であった。「女性学を生んだのはフェミニズムという女性運動ですが、フェミニズムはけっして女も男のようにふるまいたいか、弱者が強者になりたいという思想ではありません。フェミニズムは弱者が弱者のまままで尊重されることを求める思想です」と結んでいる。

男女共学の大学では、女性にとって公正な入試や教育が行われていない現実が、いまだに東京大学においてもあることを訴えている。

女子の高等教育の歴史を振り返ると、明治期に本学の前身である共立女子職業学校のような女子だけの学校ができたのは、当時の男女共学の大学では女子に対する教育が女子の望むようにできなかったからだと思われる。共立女子大学の前身である共立女子職業学校は、1886（明治19）年に男女師範学

校の合併に反対した東京女子師範学校の関係者ら34人の発起人により設立された。「女性の自立と自活」を建学の精神とし、家庭科教員の養成を主な目的として女子教育を開始した。

お茶の水女子大学の歴史をホームページで見ると、1875（明治8）年にお茶の水（現文京区湯島1丁目）に東京女子師範学校として開学した。1885（明治18）年、1872（明治5）年に開校していた東京師範学校に合併され、男女共学となる。この時、先述したようにこれに反対する先生方が、共立女子職業学校を設立した。その後、東京師範学校は高等師範学校となり、1890（明治23）年に女子部が分離して女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）が創立された。明治期は、男女共学の中では女子教育に困難な面があったと思われる。

明治期には、性差別の横行した学問領域において女子専門の教育が行われた。女子美術学校は1900（明治33）年に開校し、戦後の女子美術大学につながる。女性に対して、高等教育機関における美術教育の門戸が開かれていなかったことが開校の理由である。東京芸術大学の前身の東京美術学校に女子

が入学したのは戦後のことである。

共立女子職業学校も女子美術学校も開学の地は文京区本郷弓町で、私塾的な形で始められた。

体育・スポーツにおいても男女差別はあり、近代オリンピックの功労者クルーベルタン男爵は女性がオリンピックに参加するなどありえないと語っていた。私立東京女子体操音楽学校（後の東京女子体育大）が開設されたのは、1902（明治35）年である。このような女子大学の原点には、教育の男女差別に立ち向かう建学の精神がある。

また、女子に対する高等教育が遅れていることを憂い、「専門性をもつ教養人を育てるリベラルアーツ教育」を目指す大学として、東京女子大学（1918年開学）や聖心女子大学（1916年開校）などがある。本学では、後述する家政学部に次いで、1953（昭和28）年に文芸学部、1990（平成2）年に国際文化学部（後の国際学部）を設置した。女子のリベラルアーツ教育を目指したものである。

共立女子職業学校の初代校長服部一三が、「女子に適応する諸職業を授け、広く世の婦女子に実業を得しめんとする」と述べているように、女子に多い職

業や学問領域（看護師、管理栄養士・栄養士、家政学、児童学）を教育する女子大学がある。本学では家政学部を1949（昭和24）年に設置し、また短大看護学科を経て2013（平成25）年に看護学部を新設した。

しかし、これらの領域は男性にも門戸が開放されており、女子大学に限らず男女共学の大学が多いので、女子大学の特性ではない。看護系大学の数は250を超えるが、女子大学の数は少数である。

このように、女子大学の特徴を考えると、女子大学の今後の進む方向性をどう考えればよいのか悩むところである。女子の、4年制大学進学率は高くなってきたが、女子大学の数は20年前に比較して98から77に減少している。女子の、4年制大学への進学率（2016年で48・2％）はさらに高くなる可能性はあるものの、その受け入れ先としての女子大学の果たす役割は限定的である。

人口減少と超高齢化が進む中で、女性の活躍がさらに期待される。総務省統計局の労働力調査による年齢階級別労働力人口比率のいわゆるM字カーブ（女性の労働力率は学校卒業後の年代で上昇し、その後、

結婚・出産期にいったん低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇する）の底は、1988（昭和63）年は51・1％（30～34歳）だったが、2018（平成30）年は74・8％（35～39歳）となっており、M字の底が上昇し、もはや台形に近づいている。主要国の女性の年齢階級別労働力率の比較では、30～34歳については75・2％と米国の74・5％より高くなった（2017年）。総務省の科学技術研究調査では、女性研究者数は1989年の3万8224人から2018年の15万545人に増加し、研究者に占める女性の割合は1989年の7・1％から2018年は16・2％に増加したと報告されている。

しかし、日本の女性の就業率は世界の中ではまだ低いほうである。OECDの雇用アウトロック2016によると、25～54歳の女性の就業率は72・7％であり、加盟34国中23位となっている。1位はアイスランドの84・1％である。

世界経済フォーラムが公表した2018年のジェンダーギャップ指数は、149カ国中110位である。この指数は、経済、教育、政治、健康の各分野における男女平等の程度を示す指数である。1が完

全平等であり、スコアは教育分野0・994、健康分野0・979と高く、経済分野0・595、政治分野0・081と低い。津田塾大学の高橋裕子学長は、2019年3月18日の日経新聞で、全国の大学における女性学長の割合は11・3%であるとして、男性優位の日本の大学の問題を述べている。「ダイバーシティを重視した教育研究環境を実現していくためには、高等教育機関の意思決定に参画できる女性の割合を増加させ、大学のリーダーシップに多様性を実現していくことが日本社会の喫緊の課題だ」とされている。かくいう私も、女子大学の学長ながら男性である。

私立大学は建学の精神に基づく多様性が特徴であり、役割分担すみわけがあるはずである。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」では、大学の機能別分化として人材養成の三つの観点（例）を挙げ、「これら三つの観点も踏まえつつ、各大学の役割・機能の明確化・特色化を加速する改革を促す」としている。

三つの観点（例）は、「世界を牽引する人材を養成」「高度な教養と専門性を備えた先導的な人材を養

成」「具体の職業やスキルを意識した教育を行い、高い実務能力を備えた人材を養成」である。本学のような女子大学を考えた場合、建学の原点に立ち返れば、そのまま人材養成目的とできる。そのためには、教育の質保証に取り組みなければならない。

本学は、2020年度にビジネス学部新設の認可を申請中である。人材養成目的として、「ビジネスの場で活用できる知識・技能と必要な教養を身につけ、他者と協働してリーダーシップを発揮できる人材を養成する」掲げる予定である。女子大学初のビジネス学部であり、女性活躍推進に寄与できると考えている。

少子高齢化、人口減少社会においては、女性の活躍を推進することによって日本社会の持続可能な発展が可能となる。そのためには女子高等教育の役割が大きい。男女共学の大学の教育環境において男女差別が続く現状では、女子大学が果たす役割の重要性も継続する。多様な学生を受け入れる方向性を保ちつつ、女子大学の強みを生かしていきたい。